

<シンポジウム報告>

迷える者たちの翻訳者

中世ユダヤ教におけるヒエロニウムスとウルガータ聖書

加藤 哲平

1. はじめに

本稿は、中世のユダヤ教徒が、論争相手であるキリスト教徒のラテン語訳聖書とその翻訳者ヒエロニウムス(347-420)をどのように評価していたかを検証するものである¹。

前半では、古代から中世、そして近世に至るラテン語訳聖書の歴史を辿る。「古ラテン語訳」を嚆矢に、ヒエロニウムスによる改訂・翻訳の時代、そしてカトリック教会の正典としての所謂「ウルガータ聖書」が

¹ 本稿は、2020年9月13日にオンラインで開催された京都ユダヤ思想学会第13回学術大会シンポジウム「中世ユダヤ教聖書解釈の諸相：キリスト教世界とその周辺」での発題に基づく。シンポジウムに招いてくださった企画者の志田雅宏氏に感謝申し上げます。なお本稿の後半部分は次の論考と一部重なる：T. Kato, "A Man of Three Languages: Jerome's Indebtedness to Jews and his Contribution to Jewish Studies," in *Jewish Multilingualism in Late Antiquity and Early Middle Ages* (working title), ed. L.V. Rutgers, W. van Bekkum, and C. Cordononi (Leiden: Brill, 2021), forthcoming. 本稿で用いる略号：NCHB = *The New Cambridge History of the Bible*.

できあがるまでの歴史を通じて、ユダヤ教・キリスト教の宗教論争における議論の土台を確認する。

後半では、ラテン語訳聖書やヒエロニウムスに言及している中世のユダヤ教聖書釈義家たちを取り上げ、彼らとその翻訳や解釈をどのように論争に利用したかを検証する。釈義家たちは、一方では、ヒエロニウムスを「迷える者たちの翻訳者」と呼んで蔑み、その翻訳や解釈の誤りを取り上げて激しく攻撃することもあれば、他方では、彼のユダヤ教聖書解釈への造詣の深さを称え、あたかもユダヤ教徒の一人であるかのように遇することもあった。

以上の検証を通じて、中世ユダヤ教聖書解釈の諸相の一端を紹介したい。

2. ラテン語訳聖書の歴史

まず、ユダヤ教・キリスト教の宗教論争の基盤であるラテン語訳聖書の歴史を古代に遡って概観する。ラテン語訳聖書の歴史は大きく3つの時代から成っている²。すなわち、第一に、ヒエロニウムス以前の時代、第二に、ヒエロニウムスの時代、そして第三に、ヒエロニウムス以後の時代である。

2.1 ヒエロニウムス以前の時代

ヒエロニウムス以前に成立したラテン語訳聖書としては、「古ラテン語訳 (Vetus Latina)」がある (この名称は研究者によって付けられたも

² ラテン語訳聖書の歴史を3つの時代に分けることについては、H.F.D. Sparks, "The Latin Bible," in *The Bible in Its Ancient and English Versions*, ed. H.W. Robinson (Oxford: Clarendon, 1940), 100-27.

ので、当時のキリスト教徒がこの訳を古ラテン語訳と呼んだわけではない³。これは後2世紀後半に北アフリカで成立した旧・新約聖書の翻訳聖書である。聖書のラテン語訳がイタリアではなくアフリカでできたというのはやや意外かもしれないが、紀元後の北アフリカにおけるラテン教父文学の興隆（テルトゥリアヌス、キュプリアヌス、アウグスティヌスなど）を考え合わせれば納得できる。

古ラテン語訳の新約聖書の部分はギリシア語原典からの翻訳である。しかし、旧約聖書についてはヘブライ語（およびアラム語）原典ではなく、「七十人訳」と呼ばれるギリシア語訳からの重訳である。初期教会のキリスト教徒たちにとっての旧約聖書は、ユダヤ教徒との共有物であるヘブライ語原典ではなく、翻訳という「更新」作業を経て最新の神意を反映した七十人訳だったのである⁴。古ラテン語訳はあくまでこの靈感を受けた七十人訳の内容を知るための道具にすぎず、独立した権威を持つことはなかった。

古ラテン語訳は組織的に作られた翻訳ではなく、さまざまな場所で個人の必要に応じて散発的に作成されたものの集成である。それゆえに古ラテン語訳には複数の版が存在した（たとえばアウグスティヌスが重視した「イタラ訳」など）⁵。聖書全体を保存する写本は存在しないため、

³ 古ラテン語訳については、Sparks, “The Latin Bible,” 103-10; B. Kedar, “The Latin Translations,” in *Mikra*, ed. M.J. Mulder and H. Sysling (Philadelphia: Fortress, 1988), 229-338, esp. 135-41; P.-M. Bogaert, “The Latin Bible,” in *NCHB*, I, ed. J.C. Paget and J. Schaper (Cambridge: Cambridge University Press, 2013), 505-26, esp. 505-14.

⁴ 翻訳を「更新」と捉える初期キリスト教思想については、加藤哲平「経典の「更新」としての翻訳：ギリシア語訳とラテン語訳聖書をめぐる諸問題から」、『京都・宗教論叢』第14号、2020年、11-14頁。

⁵ アウグスティヌス『キリスト教の教え』2.15.22 (CChr.SL 32, 47)：「さまざまな翻訳の中で、イタラが他のどの訳よりも優れている。というのは、イタラ訳は言葉への忠実さと文意の明晰さを共に備えているからである (*In ipsi autem*

現在我々が手にする古ラテン語訳のテキストは、わずかに残る聖書写本と共に、教父文学や聖句集、または典礼の式文などの中にある引用をつなぎ合わせたものである。そのような証拠をもとに再構成された校訂版としては、サバティエ版（1751年）と⁶、現在も校訂作業が継続中の古ラテン語訳研究所版（1941年～）がある⁷。

2.2 ヒエロニムスの時代

三期に亘る聖書学者としてのヒエロニムスの仕事のうち第1期と第2期は、この古ラテン語訳の改訂作業であった⁸。まず第1期として、ローマに滞在していた382-84年頃、彼は古ラテン語訳の福音書と詩篇を、ギリシア語テキストと校合しながら改訂した。福音書の改訂作業は、当時彼が秘書として仕えていた教皇ダマススからの依頼だった。新約聖書に関するヒエロニムスの仕事はこのときの福音書の改訂のみで、その他の文書はシリア人ルフィヌスという人物の手になるものと考えられて

interpretationibus, Itala ceteris praeferatur; nam est verborum tenacior cum perspicuitate sententiae」。

⁶ P. Sabatier, *Bibliorum sacrorum latinae versiones antiquae seu Vetus Italica* (Paris: Ex regia Reginaldi Florentini Rhemensis typographia, 1743-1749, 1751).

⁷ 古ラテン語訳研究所 (Vetus Latina-Institut) とは、ベネディクト会修士 Bonifatius Fischer が古ラテン語訳の校訂版を作成するために1945年にドイツのポイロンに設立した研究所である。彼のあとには、Hermann Josef Frede (1973-1998)、Roger Gryson (1998-2014)、Thomas Johann Bauer (2014-)らが所長を務めてきた。現在までに新旧約聖書のほぼ半分を分冊形式で出版しており、現在も継続中である。

⁸ ヒエロニムスとその聖書翻訳については、加藤哲平『ヒエロニムスの聖書翻訳』教文館、2018年、142-51頁。

いる⁹。このときの詩篇は「ローマ詩篇」と通称されているが、全体としては現存しない¹⁰。

第2期に当たる386-91年頃ベツレヘムにおいて、ヒエロニウムスは詩篇、ヨブ記、歴代誌、ソロモンの書（箴言、コヘレト書、雅歌）の古ラテン語訳を改訂した。しかし今度の改訂ではその精度をより高めるために、校合の基礎となるギリシア語テキストを、オリゲネスによる改訂を経たいわゆるヘクサプラ版七十人訳に変えた。このときの改訂詩篇は、後述するようにアルクイヌスの影響で、のちにガリア地方でよく読まれるようになったために「ガリア詩篇」と呼ばれる。なぜヒエロニウムスが第2期の仕事を上の4書のみでやめてしまったのかは不明である。

第3期の390-406/7年にベツレヘムにおいて、ヒエロニウムスはヘブライ語原典を底本とした新しい翻訳を作成した。これはかねてより彼が目指していた「ヘブライ的真理」への回帰を意味している。ただし、翻訳に際しアキラ、シュンマコス、テオドティオンらの諸ギリシア語訳をも参照したことは確かである。ヒエロニウムスは、おそらくサムエル記・列王記から翻訳を始め、詩篇（「ヘブライ語詩篇」と呼ばれる）¹¹、預言書、ヨブ記、エズラ記・ネヘミヤ記、歴代誌、ソロモンの書、五書、エステル記、ヨシュア記、士師記・ルツ記を訳すと、正典外文書である『トビト記』と『ユディト記』をも訳し、17年に及ぶ訳業を終えた。

⁹ C.B. Tkacz, "Labor tam utilis: The Creation of the Vulgate," *Vigiliae Christianae* 50 (1996): 42-72, esp. 53. シリア人ルフィヌスについては、W. Dunphy, "Ps-Rufinus and the Vulgate: Evidence Wanting!" *Augustinianum* 52 (2012): 219-56.

¹⁰ D. de Bruyne, "Le problème du psautier romain," *Revue bénédictine* 18 (1930): 101-26.

¹¹ H. de Sainte-Marie, ed., *Sancti Hieronymi psalterium iuxta hebraeos* (Collectanea biblica Latina 11; Rome: Abbaye Saint-Jérôme, 1954).

ただし、こうしてできたヒエロニウムのラテン語訳聖書がただちに「ウルガータ・エディティオ（普及版）」の名で呼ばれたわけではない¹²。ヒエロニウムの時代もそれ以後も「ウルガータ」とは、まずもって七十人訳および古ラテン語訳を指す言葉だった。ヒエロニウムの翻訳が「ウルガータ」と次第に呼ばれ始めるのは13世紀のことであり、また公式にその名がついたのは1546年のトレント公会議でのことであった。

2.3 ヒエロニウムス以後の時代

ヒエロニウムスによるヘブライ語原典からの翻訳聖書は、ユダヤ教徒の誤謬に染まっており、七十人訳の権威を貶めるものでしかないと、多くのキリスト教徒から批判されることになった¹³。年少の同時代人であるアウグスティヌスもまた批判派の一人であった。アウグスティヌスによれば（『書簡71』5）、リビアのある教会で当地の司教がヨナ書4:6を朗読したときに、ヒエロニウムのヘブライ語からの翻訳に従って、ヨナが腰を下していた「キカヨン（קיקיון）」という木を「ツタ (hedera)」として読んだところ、古ラテン語訳の「ヒョウタン (cucurbita)」という訳語に親しんでいた聴衆を激しく怒らせてしまったという¹⁴。

¹² E.F. Sutcliffe, "The Name 'Vulgate'," *Biblica* 29 (1948): 345-52.

¹³ ヒエロニウムス以後のラテン語訳聖書の歴史については、R. Loewe, "The Medieval History of the Latin Vulgate," in *The Cambridge History of the Bible*, II, ed. G.W.H. Lampe (Cambridge: Cambridge University Press, 1969), 102-54; P.-M. Bogaert, "The Latin Bible, c. 600 to c. 900," in *NCHB*, II, ed. R. Marsden and E. Ann Matter (Cambridge: Cambridge University Press, 2012), 69-92; F. van Liere, "The Latin Bible, c. 900 to the Council of Trent, 1546," in *NCHB*, II, 93-109; *idem*, *An Introduction to the Medieval Bible* (Cambridge: Cambridge University Press, 2014); Vasile Babota, "The Vulgate in Church Tradition," in *H Μετάφραση της Βίβλου στην Εκκλησία και στην Εκπαίδευση* (Athens, 2015), 47-58.

¹⁴ A. Fürst, "Kürbis oder Efeu? Zur Übersetzung von Jona 4,6 in der Septuaginta und bei Hieronymus," *Biblische Notizen* 72 (1994): 12-19; repr. in *idem*, *Von Origenes und Hieronymus zu Augustinus: Studien zur antiken Theologiegeschichte* (Arbeiten zur Kirchengeschichte 115; Berlin: De Gruyter, 2011), 315-22.

このように、5世紀から6世紀にかけては古ラテン語訳（およびその底本である七十人訳）がいまだ優勢だったが、大グレゴリウス（540-604年）やセビリャのイシドルス（560-636年）など学識ある教父たちの間で次第にヒエロニムスの翻訳の正確さが認識されるようになっていた。その中でも代表的な人物がカッシオドルス（485-580年）である¹⁵。彼は東ゴート王国で長く政治家を務めた後、南イタリアにヴィヴァリウム修道院を建てて聖書の研究に勤しんだ。彼の功績の一つは、ヒエロニムスの翻訳と古ラテン語訳をパンデクト（一冊本）にまとめ、現在の「ウルガータ聖書」の基礎を作ったことである。その構成は次のようになる。

1. ヒエロニムスによってヘブライ語とアラム語から訳された旧約（詩篇以外）
2. ヒエロニムスによって改訂された古ラテン語訳の詩篇（ガリア詩篇）
3. ヒエロニムスによってアラム語から訳された『トビト記』と『ユデイト記』
4. 古ラテン語訳の『知恵の書』『シラ書』『第一マカベア書』『第二マカベア書』『バルク書』
5. ヒエロニムスによって改訂された古ラテン語訳の福音書
6. シリア人ルフィヌスによって改訂された古ラテン語訳の使徒行伝、書簡、黙示録

¹⁵ カッシオドルスについては、A. Momigliano, "Cassiodorus and the Italian Culture of his Time," *Proceedings of the British Academy* 41 (1955): 207-45; repr. in *idem, Secondo contributo alla storia degli studi classici* (Storia e letteratura 77; Rome: Edizioni di storia e letteratura, 1960), 191-229; J.J. O'Donnel, *Cassiodorus* (Berkeley: University of California Press, 1979); 上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成5：後期ラテン教父』平凡社、1993年、329-417頁などを参照。

7世紀から8世紀にかけて、ノーサンブリア（イングランド北部）のセオルフリド（642-716年）は、イタリアから持ち帰った多くの聖書写本を用いて、ウェアマウス＝ジャロウ二重修道院で3冊の聖書パンデクトを写させた。そのうちの 하나가、現存する最古の完全なウルガータ写本とされるアミアティヌス写本である¹⁶。これはヘブライ語に基づくヒエロニムス訳の旧約聖書（詩篇も）と新約聖書の全体を含んでいることから、最上のウルガータ写本と見なされている¹⁷。ただし、アミアティヌス写本のようなパンデクト形式が主流になるのは9世紀以降のことで、それまでは聖書文書ごとのコーデックスも多く作られていた。また9世紀以降も福音書と詩篇に関しては個別の写本が作られることが多かった¹⁸。パンデクトが主流になると聖書文書の並べ方が問題となってくるが、一説では旧約聖書だけでも212通り、新約聖書を入れるとほとんど無数の並べ方があったという¹⁹。すべての写本がアミアティヌス写本のように丁寧に作られていたわけではもちろんない。写字生たちによる誤写、改竄、付加、削除については、ヒエロニムスが生きていた時代からの大問題だった。加えて、時代が下るにつれ、ヒエロニムスのラテン語訳が古ラテン語訳によって汚染されるようになった。これは、古ラテン語訳に親しんでいた写字生が無意識にそれをヒエロニムス訳に混ぜて

¹⁶ セオルフリドとアミアティヌス写本については、R. Marsden, *The Text of the Old Testament in Anglo-Saxon England* (Cambridge Studies in Anglo-Saxon England 15; Cambridge: Cambridge University Press, 1995), 76-139; Bogaert, "The Latin Bible c. 600 to c. 900," 75-76.

¹⁷ B.M. メツガー『新約聖書の本文研究』橋本滋男訳、日本基督教団出版局、1999年、94頁。

¹⁸ 福音書のラテン語訳の伝播と発展については、D. Shepard, "The Latin Gospelbook, c. 600-1200," in *NCHB*, II, 338-62; H.A.G. Houghton, *The Latin New Testament: A Guide to its Early History, Texts, and Manuscripts* (Oxford: Oxford University Press, 2016). 詩篇については、Th. Gross-Diaz, "The Latin Psalter," in *NCHB*, II, 427-45.

¹⁹ Bogaert, "The Latin Bible c. 600 to c. 900," 88.

しまった場合もあれば、意図的にヒエロニムス訳に「直し」を加えようとした場合もあった。

こうした混乱状況を是正しようとする2つの改訂の試みがカロリング朝フランク王国(8~10世紀)に見られた。第一はアルクイヌス(735-804年)の活動である²⁰。彼はカール大帝(在位800-814年)の命で、出回っている聖書写本の文法的誤りなどを正した上で、トゥールのサン・マルタン修道院で多くのパンデクトを作らせた。写字生たちは手本となる写本のページを外して回覧することで、複数の写本を同時に作成することができた²¹。カラフルな装飾の施されたトゥールの写本の最大の特徴は、詩篇についてはヒエロニムスの第2期改訂版を収録していることである²²。こうしたアルクイヌスによる偏愛(理由は不明)のために、この版は「ガリア詩篇」と呼ばれるようになった。そしてトゥールで写された聖書が標準聖書としてヨーロッパ全体に広まるようになると、ガリア詩篇は他の版の詩篇を圧倒するようになったのである。アルクイヌスの改訂の問題は、その目的がヒエロニムスの訳文を回復させるのではなく、あくまで教育上の模範となるような文法的に正しいラテン語文にすることだった点である²³。

²⁰ H.H. Glunz, *History of the Vulgate in England from Alcuin to Roger Bacon* (Cambridge: Cambridge University Press, 1933), 24-32; B. Fischer, *Lateinische Bibelhandschriften im frühen Mittelalter* (Vetus Latina 11; Freiburg: Herder, 1985), 203-403; Bogaert, "The Latin Bible c. 600 to c. 900," 83-84; D. Ganz, "Carolingian Bibles," in *NCHB*, II, 325-37, esp. 330-34. アルクイヌスについては、松川成夫「カロリング・ルネサンスとアルクイヌス」、上智大学中世思想研究所編『教育思想史Ⅲ：中世の教育思想(上)』東洋館、1984年、129-55頁。同編『中世思想原典集成6：カロリング・ルネサンス』平凡社、1992年、117-43頁などを参照。

²¹ D. Ganz, "Carolingian Bibles," in *NCHB*, II, 325-37, esp. 333.

²² Gross-Diaz, "The Latin Psalter," 430-33.

²³ Sparks, "The Latin Bible," 119.

第二は、オルレアンの司教テオドゥルフス(750-821年)の活動である²⁴。彼は装飾を極力排した聖書写本を作らせたことで知られている。これらの写本は、旧約聖書が律法・預言者・諸書に三分割されていること、ヘブライ語テキストに基づくと見られる修正が施されていること、そしてガリア詩篇でなくヘブライ語詩篇が収録されていることなどから、ユダヤ教徒の手を借りて作成されたのではないかと考えられている²⁵。採用した本文の異読を欄外に残したり、校訂記号を用いて校訂の意図を表したりと、テオドゥルフスの改訂は極めて科学的な方法論に則ったものだったが、規模の点でアルクイヌスに劣るため、後世への影響力をあまり持たなかった。

以上のように、カロリング・ルネサンスまでのラテン語訳聖書写本の状況は比較的良好に知られているが、10世紀以降の写本についての組織的な研究はほとんどなされていない²⁶。というのも、それは非常な困難を伴う作業だからである。この時代の写字生たちはラテン語訳テキストをただ筆写するだけでなく、それを積極的に評価し、ときに教父引用や原典と比較することで、正統信仰に照らして「正しい」テキストを作成しようとした。これは修道院や司教座聖堂学校で当時生まれつつあったスコラ学的な学問スタイルの影響による。しかし、それゆえに、かえってラテン語訳テキストがもともと持っていた系統ごとの特徴が失われ、伝承経路が無秩序になってしまったのである。たとえばカンタベリー大司

²⁴ テオドゥルフスについては、A. Dahlhaus-Berg, *Nova antiquitas et antiqua novitas: Typologische Exegese und isidorianisches Geschichtsbild bei Theodulf von Orleans* (Cologne: Böhlau, 1975), 39-61; 『中世思想原典集成6』153-69頁。

²⁵ Bogaert, "The Latin Bible, c. 600 to c. 900," 83.

²⁶ L. Light, "Versions et révisions du texte biblique," in *Le moyen âge et la Bible*, ed. P. Riché and G. Lobrichon (Bible de Tours les Temps 4; Paris: Beauchesne, 1984), 55-93, esp. 56; Van Liere, "The Latin Bible, c. 900 to the Council of Trent, 1546," 103.

教だったベックのランフランクス(1005-1089年)がそのような「改訂」を試みたことが知られている²⁷。

12世紀の北フランスでは、このスコラ学的方法論を継承しつつ、ランのアンセルムス(1117年死去)が『グロッサ・オルディナリア』の作成を開始した²⁸。これは教父やカロリング朝期の釈義家たち(アンブロシウス、アウグスティヌス、ヒエロニムス、大グレゴリウス、カッシオドルス、セビリヤのイシドルス、ラバヌス・マウルスなど)の解釈を聖書テキストの欄外や行間に書き込む「グロス形式」の聖書写本である。アンセルムスはパウロ書簡や詩篇のグロスから始めたが、未完のまま亡くなったので、その弟ラルフス(1133年死去)や弟子であるオセールのギルベルトウス(1134年死去)、さらにパリではペトルス・ロンバルドウス(1160年死去)らが他の聖書文書を仕上げて完成させた。こうしてできた『グロッサ・オルディナリア』は12世紀から13世紀にかけて非常に普及し、2000以上の写本が現存している。多くの聖書解釈を残したサン・ヴィクトル学派の釈義家たちも、こうしたグロス式聖書を用いていたことが知られている。

中世のラテン語訳聖書の歴史にとって次なる発展の時代は13世紀に訪れる。この時代になると、大型のパンデクトが数多く作られるだけでなく、薄い羊皮紙や、文章を圧縮して書けるゴシック文字が開発されたことで、ポータブルなポケット聖書も作られるようになった²⁹。このよ

²⁷ Van Liere, "The Latin Bible, c. 900 to the Council of Trent, 1546," 96. ベックのランフランクスとランのアンセルムスについては、矢内義頭「11-12世紀における二つの学校：ベックとラン」、『中世思想研究』第51号、2009年、119-31頁。

²⁸ L. Smith, "The Glossed Bible," in *NCHB*, II, 363-79; B. Williams, "Glossa Ordinaria and Glossa Hebraica: Midrash in Rashi and the Gloss," *Traditio* 71 (2016): 179-201.

²⁹ 関西学院大学図書館が所蔵する13世紀の小型一巻本ウルガータ聖書写本については、駒田亜紀子「13世紀後半北フランス制作『ラテン語ウルガータ訳聖書写本』：中世フランスの掌中の聖書」、『時計台』第88号、2019年、2-13頁。

うに多くの聖書写本が流通するようになった結果、聖職者のみならず世俗の金満家も聖書を所有するようになったのである。さらに、このような聖書写本のハード面のみならず、ソフト面にも変化が見られた。すなわち「パリ聖書」の誕生である³⁰。パリ聖書の最も顕著な特徴は、カンタベリー大司教ステファン・ラングトン(1150-1228年)に帰される新しい章区分が採用されていることであり、これは現在でも使われている。また写本の聖書部分のあとに、ヒエロニムスの著作を大幅に増補した『ヘブライ語の名前説明』という補遺が付されていることも特筆すべきである。一般的には、ロジャー・ベーコン(1219-1292年)の記述をもとに、パリ聖書はパリ大学の神学者たちの公式聖書だったと理解されているが、現在ではむしろ当時の商業的な書籍売買の文脈から、パリの書店が神学生や神学者に委託して作成させたものではないかと考えられている³¹。

1452年にマインツで発行された最初の印刷聖書であるグーテンベルク聖書は、ラングトン方式の章区分を始め、多くの点でパリ聖書のテキストに基づいたものだった³²。その後50年間に、ラテン語訳聖書は少なくとも100の版がさまざまな印刷所で発行された。ただし、こうして広まっていったラテン語訳聖書は、ヘブライ語やギリシア語原典を至上とする人文学者たちにとって、すでに文献学的には物足りないものになっ

³⁰ Glunz, *History of the Vulgate*, 259-93; L. Light, "The Thirteenth Century and the Paris Bible," in *NCHB*, II, 380-91. ラングトンの章区分については、P. Saenger and L. Bruck, "The Anglo-Hebraic Origins of the Modern Chapter Division of the Latin Bible," in *La fractura historiografica. Edad Media y Renacimiento desde el tercer milenio* (Salamanca: Seminario de Estudios Medievales y Renacentistas, 2008), 177-202.

³¹ Van Liere, "The Latin Bible, c. 900 to the Council of Trent, 1546," 103; Light, "The Thirteenth Century and the Paris Bible," 389.

³² 初期近代におけるラテン語訳聖書については、Van Liere, "The Latin Bible, c. 900 to the Council of Trent, 1546," 107-9; B. Gordon and E. Cameron, "Latin Bibles in the Early Modern Period," in *NCHB*, III, ed. E. Cameron (Cambridge: Cambridge University Press, 2016), 187-216.

ていた。それどころか、ラテン語訳聖書の権威は、人文学者たちが聖書原典を出版することを躊躇する原因にすらなってしまった。そこで、シスネロスのフランシスコ・ヒメネス枢機卿による「コンプトウム多言語聖書」（1520年）を皮切りに、原典とラテン語訳聖書を比較し、後者を改訂しようとする試みも行われた。とりわけステファヌス（プラトンの校訂本を出したステファヌスの父ロベール・エティエンヌ）による1528年の改訂版は、旧約聖書については古いラテン語訳写本とヘブライ語テキストを比較し、一方で新約聖書については初めて節区分を適用した画期的なものだったが、教会との軋轢ゆえにステファヌスがプロテスタントに改宗するという事態に至った。こうしたさまざまな「延命措置」がとられたにもかかわらず、ラテン語訳聖書はすでに西洋キリスト教世界の唯一の聖書としての地位を失いつつあった。1546年のトレント公会議がラテン語訳聖書を「共通版（*vulgata editio*）」として定めたことは、その権威を守るための最後の一手だったといえる。

こうして「ウルガータ」と公式に呼ばれるようになったラテン語訳聖書を改良するために、教皇シクストゥス5世はアミアティヌス写本をもとに新たな改訂テキストを作らせ、1590年に「シクストゥス版」として出版した。しかし、教皇自身のテキストへの介入により多くの間違いを含んでいたため、1592年にクレメンス8世がステファヌス版などをもとにさらなる改訂を加えた「シクストゥス＝クレメンス版」を公にした。この版はその後長きに亘ってウルガータ聖書の代表テキストとして読み継がれることになるが、すでにヒエロニムスの訳とは言えないものになっていた。そこで、ヒエロニムスの本文を回復するために、1889年にはオックスフォードのジョン・ワーズワースとヘンリー・ホワイトが

新約聖書を改訂し³³、そして1907-1994年には教皇ピウス10世の命によりアンリ・クエンタン率いるベネディクト会修道士たちがローマのサン・ジローラモ修道院に集まり、旧約聖書を改訂した³⁴。このオックスフォード版新約聖書とベネディクト会版旧約聖書に基づきつつも、新たな基準でテキストを作り直したハンディな学術的校訂版として、シュトゥットガルトのドイツ聖書協会版（初版1969年）がある³⁵。こうしたヒエロニムスの本文を回復しようとする試みとは別に、現代の聖書学による原典の批判的校訂版に合わせた（つまり歴史的には存在しない本文を含む）ラテン語訳として『ノウア・ウルガータ』（1979年）がある³⁶。これは現代のカトリック教会の公式ラテン語聖書として今も用いられている。

3. 中世ユダヤ教聖書解釈におけるラテン語訳聖書とヒエロニムス

中世のユダヤ教・キリスト教の宗教論争において常に中心的な問題となったのは、聖書テキストとその解釈である³⁷。聖書を読む解釈原理が論じられ、また根本的な神学問題が論じられる際の証明のために聖書が

³³ J. Wordsworth and H.J. White, eds., *Novum Testamentum Domini nostri Iesu Christi latine secundum editionem sancti Hieronymi* (3 vols.; Oxford: Clarendon, 1889-1954).

³⁴ H. Quentin et al., eds., *Biblia Sacra iuxta latinam vulgatam versionem ad codicum fidem* (18 vols.; Rome: Typis Polyglottis Vaticanis, 1926-1995).

³⁵ R. Weber and R. Gryson, eds., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem* (5th ed.; Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2007 [1969]).

³⁶ *Nova Vulgata bibliorum sacrorum editio, sacrosancti oecumenici concilii Vaticani II ratione habita, iussu PP. VI recognita, auctoritate Ioannis Pauli PP. II promulgata* (Vatican: Libreria Editrice Vaticana, 1979).

³⁷ A. Sapir Abulafia, "The Bible in Jewish-Christian Dialogue," in *NCHB*, II, 616-37, esp. 617. 特にイエスをめぐるユダヤ教とキリスト教の聖書解釈については、志田雅宏「中世ユダヤ教世界におけるイエス：聖書解釈と民間伝承」、上智大学キリスト教文化研究所編『ユダヤ教とキリスト教』リトン、2019年、79-124頁。

引用された。ただし、そうした論争においてキリスト教徒たちはヘブライ語テキストではなく、ヒエロニムスのラテン語訳を読んでいた。それは時代によっては、アミアティヌス写本に連なるテキストであったかもしれないし、アルクイヌスのパンデクトや『グロッサ・オルディナリア』であったかもしれないし、あるいはパリ聖書であったかもしれない。

一方で、ユダヤ教徒たちは当然ながらヘブライ語テキストを中心に議論をしたわけだが、中には論敵が依拠するラテン語訳聖書とヒエロニムスの著作に目を通す者たちもいた³⁸。たとえば、ラシュバム(1085-1174年)、アブラハム・イブン・エズラ(1089-1164年)、ヤコブ・ベン・ルーベン(12世紀)、ヨセフ・キムヒ(1105-1170年)、ダヴィッド・キムヒ(1160-1235年)、ナフマニデス(1194-1270年)、『セフェル・ニツァホン・ヤシャン』の不詳の著者(13世紀)、ヨセフ・アルポ(1380-1444年)、イツハク・アバルバネル(1437-1508年)、エリアス・レヴィタ(1469-1549年)、アザリヤ・デイ・ロッシ(1511-1578年)、そしてトロキのイツハク・ベン・アブラハム(1533-1594年)などである。

3.1 イブン・エズラ『創世記注解』

こうした釈義家たちは、ヒエロニムスを何よりも聖書の「翻訳者(המתרגם, המעתיק)」と見なしていた。彼らにとって、ヒエロニムスの翻訳および注解を知ること、キリスト教徒との宗教論争において必要不可欠なことであった。特に、ヒエロニムスの翻訳に基づくラテン語訳聖書は論争の際にキリスト教徒が依って立つ土台であったため、ユダヤ教側としては、それを吟味して翻訳上の誤りを指摘することができ

³⁸ M. Rahmer, *Die hebräischen Traditionen in den Werken des Hieronymus durch eine Vergleichung mit den jüdischen Quellen* (Breslau: Schletter'schen, 1861), 13-14.

れば、相手に対する何よりも強力な反論材料となるわけである。いわばこのとき、ヒエロニムスはキリスト教徒の代表として、ユダヤ側からの批判の矢面に立たされている。事実イブン・エズラは、創 37:35 におけるヒエロニムスの誤訳を発見し、次のように指摘している。

シェオラーという語は、「下へ」のような〔方向の〕意味合いを持ち、「墓」という意味でもある。しかし、ここにおいて、迷える者たちの翻訳者(המתרגם לתועים)は、シェオルを「地獄(ゲヒノム)」と誤って訳している。³⁹

イブン・エズラに言わせれば、ヒエロニムスは翻訳者といってもあくまで「迷える者たちの翻訳者」なのである⁴⁰。

3.2 ヨセフ・キムヒ『セフェル・ハブリット』

またイブン・エズラの同時代人のヨセフ・キムヒは、ユダヤ教徒とキリスト教徒の架空の討論である『セフェル・ハブリット』において、イ

³⁹ イブン・エズラ『創世記注解』37.35 (M. Cohen, ed., *Mikra'ot Gedolot 'HaKeter': Genesis, II* (Ramat Gan: Bar-Ilan University, 1999), 104) : "ומלת שאולה - כמו 'מטה' (דב' כח, מג) והטעם: הקבר. ופה טעה המתרגם לתועים, שתרגם שאול - גיהנם.

⁴⁰ イブン・エズラは、シェオルを「地獄(ゲヒノム)」と訳するのは「迷える者たちの翻訳者」による誤りだと説明しているが、同箇所に関してラシは、シェオルとは「そのプシャットの解釈によれば「墓」という言葉のことであり〔……〕、そのミドラッシュの解釈は「地獄(ゲヒノム)」のこと(אבל שאולה - כפשוטו: גיהנם ומדרשו: גיהנם)だと説明している。つまり、イブン・エズラがキリスト教徒の誤謬だと断じている解釈は、実際にはユダヤ教における伝統的な解釈の一つだったわけである(『ミドラッシュ・タンフマ・イエラムデーヌ』「ヴァイエシェヴ」8参照)。イブン・エズラがラシの解釈を知らなかったとは考え難いので、彼はミドラッシュの解釈を否定するために、その出典をヒエロニムスに押し付けたことになる。以上のことについてはシンポジウムにて勝又直也氏からご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

ザ 7:14 のキリスト教的な処女懐胎の読みの元凶はヒエロニウムスであるとして、彼を批判している⁴¹。

……あなた〔キリスト教徒〕が引用したような一節は聖書にはない。むしろ、あなたがたの翻訳者であるジェロニウムス（גירונימוש המעתיק שלכם）——「彼が死霊の集まりに休まんことを」（箴 21:16）——があなたを迷わせたのである。あなたは、「見よ、処女（ベトゥラー）が身ごもった」と言った。しかし聖書には、「見よ、乙女（アルマー）が身ごもった」とある。このアルマーという言葉は、処女であれ処女でない女性であれ、若い女性を意味する。⁴²

ヨセフ・キムヒはこのあと、アルマーという語が「処女」として使われている例として創 24:43 を、「処女でない女性」の例として箴 30:19、そして男性形エレムの例として I サム 17:56 を引きながら、自説を補強している。確かにヒエロニウムスはイザ 7:14 におけるアルマーという語を、ラテン語で「処女」を意味する *virgo* と訳しているので、ヨセフ・キムヒから見れば不適切な翻訳であろう。さらにヨセフ・キムヒは興味深いことに、このヒエロニウムスの「誤訳」の出典をオリゲネスに帰している。

⁴¹ R. Chazan, *Fashioning Jewish Identity in Medieval Western Christendom* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), 131-32; Sapir Abulafia, "The Bible in Jewish-Christian Dialogue," 621-22.

⁴² ヨセフ・キムヒ『セフェル・ハブリット』（F. Talmage, ed., ספר הברית וויכוחי, ספר הברית וויכוחי (Jerusalem: Mossad Bialik, 1974), 43; F. Talmage, *The Book of the Covenant of Joseph Kimhi* (Mediaeval Sources in Translation 12; Toronto: The Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1972), 53-54) : ... כי אין במקרא כאשר אמרת. אבל גירונימוש המעתיק שלכם הוא המטעה אתכם "בקהל רפאים ינוח" (משלי כא, טז). אמרת "הנה הבתולה הרה" ובמקרא "הנה העלמה הרה". ולשון "עלמה" היא נערה עצמה, בין בתולה בין בעולה.

見よ、これはオリゲン（אוריגן）の書にある誤謬である。彼は教父であり、指導者であり、先達者である。……翻訳者ジェロニウムスは彼〔オリゲン〕に権威を置き、彼から翻訳し、彼を信じているのである。自分が理解できなかったり、自分の信仰を覆したり、彼が変えたりしたわずかな言葉を除いて。彼は信仰の根をニガヨモギに変えてしまったのである。⁴³

このようにヨセフ・キムヒは、イザ 7:14 におけるアルマーを「処女」と訳す解釈はもともとオリゲネスに由来するものであり、ヒエロニウムスはそれを取り入れて翻訳したために誤謬に陥ったのだと主張する。現代のヒエロニウムス研究でもしばしば取り沙汰されるヒエロニウムスによるオリゲネスの剽窃が、すでに 12 世紀のヨセフ・キムヒによって指摘されているわけである⁴⁴。

ただし、ヒエロニウムスの名誉のために言うならば、少なくともこの箇所についてのヨセフ・キムヒの見解は誤りである。『イザヤ書注解』第3巻においてヒエロニウムスは次のように述べる⁴⁵。

⁴³ ヨセフ・キムヒ『セフェル・ハブリット』（Talmage, ed., ספר הברית, 44; Talmage, *The Book of the Covenant*, 54) : הרי דברי כוזב כי בספר אוריגן, והוא האב והוא הרב : והוא הקדמון ... ועליו סמך גירונימוש המעתיק וממנו העתיק ובו האמין, זולתי מלים מעטים שלא הבינם או היו הפך אמונתו והחליפם והפך שורש האמונה ללענה.

⁴⁴ ヒエロニウムスがユダヤ人から聞いたと主張する聖書解釈やヘブライ語の知識はオリゲネス由来だとする議論は、たとえば、G. Bardy, "Saint Jérôme et ses maitres hébreux," *Revue bénédictine* 46 (1934): 145-64, esp. 146-47; P. Nautin, "Hieronymus," in *Theologische Realenzyklopädie* 15 (Berlin: De Gruyter, 1986), 304-15, esp. 309.

⁴⁵ ヒエロニウムスとオリゲネスを含む教父によるイザヤ書 7:14 の「処女」解釈については、A. Kamesar, "The Virgin of Isaiah 7:14: The Philological Argument from the Second to the Fifth Century," *Journal of Theological Studies*, NS, 41 (1990): 51-75.

ユダヤ人のもとに足を運んであれこれ議論するとき、連中に我々の無知に対する嘲りの種を決して与えないために「知るべきは」、処女とはヘブライ語ではこの箇所には書かれていないベトゥラーという言葉だということである。しかし、ここではその言葉の代わりに、七十人訳以外すべてが乙女と訳したアルマーという語が使われている。⁴⁶

ここから見て取れるように、ヒエロニウムスはヘブライ語で「処女」を意味するのはベトゥラーという語であり、イザヤ書に出てくるアルマーは「乙女」の意であることをはっきりと知っていた。しかし、アルマーの語根アイン・ラメッド・ムムから「隠す、秘密にする」という意味合いを引き出しつつ、「アルマーとは、単に乙女や処女のことでなく、意味を伸ばして言うと、隠された処女、あるいは秘密の処女、すなわち男たちの視界に晒されることが決してないように両親から入念に守られているような処女のことである」⁴⁷とあえて解釈したのである。

一方オリゲネスはこの問題について次のように注釈している。

⁴⁶ ヒエロニウムス『イザヤ書注解』3.7.14 (R. Gryson et al., eds., *Commentaires de Jérôme sur le prophète Isaïe, Livres I-IV* (Vetus Latina 27; Freiburg: Herder, 1994), 346-47) : *Et revera, ut cum Iudaeis conferamus pedem et nequaquam contentioso fune praebeamus eis risum nostrae imperitiae, virgo hebraice Bethula appellatur, quae in praesentii loco non scribitur, sed pro hoc verbo positum est Alma, quod praeter LXX omnes adolescentulam transtulerunt.*

⁴⁷ ヒエロニウムス『イザヤ書注解』3.7.14 (R. Gryson et al., eds., *Commentaires de Jérôme, 347-48*) : *Ergo Alma non solum puella vel virgo, sed cum ἐπιτάσει virgo abscondita dicitur et secreta, quae numquam virorum patuerit aspectibus, sed magna parentum diligentia custodita sit.*

もしユダヤ人が巧妙な説明をこしらえ上げて、「見よ、処女が」ではなく、代わりに「見よ、乙女が」と書かれていると言うなら、彼に対してこう主張しよう。七十人が処女（パルテノス）と訳したが、他の諸訳が乙女（ネアーニス）と訳したアルマーという言葉は、彼らも言うように、申命記（22:23-26）においては処女の意味に当たる。⁴⁸

オリゲネスはここで申命記22章でもアルマーの語が「処女」の意味で使われているのだから、イザヤ書でも同様の意味を持っているはずだと主張する。しかし、実際に申命記のヘブライ語テキストを見ると、そこではアルマーという語は一切出てこず、「処女」に対してはベトゥラー、「乙女」に対してはナアラーという語が使われている。ただし、七十人訳においては申命記でもイザヤ書でも「処女」に対して同じパルテノスという語が使われている。言い換えると、オリゲネスは一見ヘブライ語にさかのぼってアルマーという語の意味を解き明かそうとしているように見えるが、実際にはギリシア語の議論しか知らず、ヘブライ語テキストを確認することすら怠っていたわけである。それゆえに、ヨセフ・キムヒがヒエロニウムスをオリゲネスの受け売りにすぎないと批判するのは、少なくともこの箇所については間違っている。またヨセフ・キムヒはあくまでラテン語訳聖書の訳文だけを見ていたのであって、ヒエロニウムスの注解を読んでいたわけではないことも明らかである。

⁴⁸ オリゲネス『ケルソス駁論』1.34 (P. Koetschau, ed., *Origenes Werke I: Die Schrift vom Martyrium, Buch I-IV Gegen Celsus* (GCS 2; Leipzig: J.C. Hinrichs, 1899), 85-86; 出村みや子訳『オリゲネス3：ケルソス駁論I』（キリスト教教父著作集8）教文館、1987年、41-42頁。訳文はわずかに変えた）： *ἐὰν δὲ Ἰουδαῖος εὐρεσιλογῶν τὸ «ἰδοὺ ἡ παρθένος» μὴ γεγράφθαι λέγῃ ἀλλ' ἀντ' αὐτοῦ «ἰδοὺ ἡ νεάνις», φήσομεν πρὸς αὐτὸν ὅτι ἡ μὲν λέξις ἡ ἀαλμά, ἣν οἱ μὲν ἑβδομήκοντα μετελήφθαι πρὸς τὴν παρθένον ἄλλοι δ' εἰς τὴν νεάνιν, κείται, ὡς φασι, καὶ ἐν τῇ Δευτερονομίῳ ἐπὶ παρθένου, οὕτως ἔχουσα·*

3.3 『セフェル・ニツァホン・ヤシャン』

以上のイブン・エズラとヨセフ・キムヒの記述は、ユダヤ教聖書釈義家がキリスト教徒の代表としてのヒエロニムスを批判する例であるが、一方で、むしろヒエロニムスの翻訳や解釈の正しさを認めつつ、それに耳を貸さない他のキリスト教徒を批判する者もいた。このときヒエロニムスは、キリスト教徒でありながらも、むしろユダヤ陣営の代表として、ユダヤの聖書解釈の正しさをキリスト教徒に知らしめる役割を演じさせられることになる。たとえばドイツのライン地方で書かれた論争文学である『セフェル・ニツァホン・ヤシャン』の著者は、アウグスティヌス（『詩篇講解』19.5）などに見られる、詩篇のヘブライ語文法を無視したキリスト教的な解釈を批判しつつ、次のように述べている。

このことに関して、イエロニムスはローマにいたときに反論し、次のように述べている。「私と私の友人は努力してヘブライ語をラテン語に翻訳した。私はそのとき言葉を取り違えることはなかった」と。しかし見よ、彼のあとの者たちが出てきて書き換え、すべてを滅茶苦茶にしてしまったのである。ある者は、彼らが内容に従って書いたのであり、言葉に従ったのではないと擁護するかもしれない。しかしながら、結局のところ彼らの手にあるものは、「嘲られる者たちの空しい行い」（エレ10:15）でしかないのである。彼らは自分たちの誤謬に従って言葉を変え、また主が言ってもいないことを注解したのだった。⁴⁹

⁴⁹ 『セフェル・ニツァホン・ヤシャン』143 (D. Berger, ed., *The Jewish-Christian Debate in the High Middle Ages: A Critical Edition of the Nizzahon Vetus with an*

ここでまず『セフェル・ニツァホン・ヤシャン』の著者は、ヒエロニムスの翻訳がヘブライ語に基づいた正確なものであることを、その著作をヘブライ語に訳して引用してまで強調したあと、「彼のあとの者たち」がヒエロニムスの翻訳を「滅茶苦茶にしてしまった」ことを批判している。すなわち、ヒエロニムスの翻訳は正しかったのに、写字生や注解者たちが訳文を歪めて自分たちに都合のいい解釈を引き出した、とこの著者は理解しているのである。『セフェル・ニツァホン・ヤシャン』は中世の反キリスト教論争の代表作であるにもかかわらず、著者はヒエロニムスのみを別格に扱っている。

3.4 アザリヤ・デイ・ロッシ『メオール・エナイム』

さらに、同じユダヤ教徒の解釈を批判するために、ユダヤ教徒が本来持つべき正しい知識の持ち主としてのヒエロニムスを引き合いに出す者まで現れた。アザリヤ・デイ・ロッシである。彼はその浩瀚な著作である『メオール・エナイム』において、古代以来初めてアレクサンドリアのフィロンをユダヤ世界に紹介した人物として知られている⁵⁰。その

Introduction, Translation, and Commentary (Philadelphia: The Jewish Publication Society of America, 1979), 92 Hebrew part) : זהו ירונימוס קרא עליו תגר ברומי ואמר : אני וחביריי טרחנו וכתבנו לשון העברי ללשון לטיין ולא שניתי בו דבר, והנה קמו אחריו, וכתבו ומהפכין הכל. ואם יאמר כי לסוף באו האחרונים וכתבו לפי המשמעות [ולא] לפי לשון התיבות, וסוף סוף בין כך ובין כך אין בידם כי אם הבל מעשה תעתועים, ולפי טיעותם הפכו התיבות ופירושו דבר אשר לא דיבר ה'.

⁵⁰ A.D. Momigliano, "Greek Culture and the Jews," in *The Legacy of Greece: A New Appraisal*, ed. M.I. Finley (Oxford: Oxford University Press, 1981), 325-46, esp. 343; N.G. Cohen, "Philo Judaeus and the Torah True Library," *Tradition* 41 (2008): 31-48. ラビ・ユダヤ教的伝統におけるフィロンの評価については、D. Winston, "Philo and Rabbinic Literature," in *Cambridge Companion to Philo*, ed. A. Kamesar (Cambridge: Cambridge University Press, 2009), 231-53.

紹介の仕方は、ときに共感を示すことはあれど、基本的には批判的である。たとえばデイ・ロッシは『メオール・エナイム』第5章において、フィロンの欠点を4つ挙げている。第一に、フィロンはトーラーの原典を見たことがない。第二に、世界の創造時に原初の物質が存在していたと考えている。第三に、聖書の物語の本当の意味を単純に哲学的・知的な考えだと考えている。そして第四に、成文律法と共に口伝律法があると考えていない。

こうした観点からフィロンに対してはかなり批判的な態度を取るのに対し、ヒエロニウムスについては、そうしたフィロンに対する批判を正当化する裏づけを与えてくれる存在と見なしている。いうなれば、ヒエロニウムスの見解に基づいて、フィロンという異端を批判しているのである。

イエディディヤ〔フィロン〕はギリシア人たちの世界で育ち、ギリシア語においては知恵があり雄弁であるにもかかわらず、トーラー本来の原典本文を見ることも知ることもなかった。これは聖なる言語〔ヘブライ語〕だけの問題ではなく、彼はイスラエルの地で広く使われていたアラム語にも無知だった。彼が学び、著作の中で論じたトーラーとは、長老たちの翻訳〔七十人訳〕で自分が読んだことだけに基いている。長老たちが自分たちで王のために持参したトーラーをアラム語版から訳したという見解を受け入れているので、彼はモーセがシナイ山でアラム語のトーラーを授けられたと信じてもいる。あなたは『モーセの生涯』第2巻で〔次のことを〕見るだろう。この中で彼はプロトレマイオスと長老たちの物語を語り、次のように述べている、「かつて我々のトーラーはアラム語で書かれて

いた。そして異邦人たちがその美を望み、プロトレマイオスが現れたときまで、長い間その言語のままだった」。このことについて、キリスト教徒の翻訳者は『ダニエル書注解』第1巻の中で彼を非難し、それは聖なる言語で与えられたのだと真実に従って語った。⁵¹

デイ・ロッシはヘブライ語とアラム語に関するフィロンの無知を指摘し、またトーラーの原語がアラム語だったというフィロンの主張を批判している。そしてヒエロニウムスもまた同じ批判をフィロンに対して行っていたと述べた上で、「真実」をヒエロニウムスに語らせている。ここで紹介されているフィロンとヒエロニウムスの証言は、実際にフィロン『モーセの生涯』(2.25-29)とヒエロニウムスの『ダニエル書注解』(1.1.4a.c.)に見られる。デイ・ロッシはギリシア語には通じていなかったようなので、彼はいずれの注解書もラテン語で読み込んだものと思われる⁵²。

ちなみに、デイ・ロッシが使っていたラテン語の新約聖書はステファヌス版の第3版である通称「高貴版 (editio regia)」だったと考えられる。というのも、デイ・ロッシは『メオール・エナイム』第9章におい

⁵¹ אֶזְרִיאֵהוּ דֵּי רֹסִי [D. Cassel, ed., ספר מאור, 109; J. Weinberg, *Azariah de' Rossi: The Light of the Eyes* (New Haven: Yale University Press, 2001), 129. 私訳は一部 Weinberg の読みに従う] : והנה זה יידידיה אשר גדל בארצות היונים עם כל חכמתו ורוחה : מליצתו בלשונם לא ראה ולא ידע את התור' בעצם מקורה, לא מבעיא בלשון הקדש כי גם הארמי המפורסם בארץ ישראל נעלם ממנו. וכל תורתו אשר למד ואשר כתב בספריו כלם לא היתה אלא כפי מה שקרא בהעתקה הזאת של הזקנים ההמה ובהיות מן המקובל. אצלו שהעתויה מנוסח ארמי אשר הביאו למלך היה מאמין כי גם למשה מסיני בארמי נתנה. הלא תראה בספרו השני מחיי משה (דף תק"נח) כאשר זכר מעשה תלמי והזקנים שכתב וז"ל תורתנו בזמן קדמון נכתבה בלשון ארמי וכן התמידה אורך ימים בלשון ההוא עד אשר גם אומות העולם חשקו ביפיה ובא תלמי וכו', ועל הדבר הזה תפש אותו המעתיק לנוצרים. כפרושו לדניאל א', כי אמר כפי האמת שנתנה בלשון הקדש.

⁵² Weinberg, *The Light of the Eyes*, xxxvi.

て、ラテン語聖書の巻末に付された索引を参照することで、新約聖書における旧約引用がヘブライ語テキストと異なる箇所を簡単に確認できると述べているので、同様の索引を備えた「高貴版」こそが彼の聖書だと分かるのである⁵³。ひとくちにラテン語訳聖書といっても長いテキスト史があることは本稿の前半で示したとおりである。ユダヤ教釈義家がどの版を使っていたかを特定できれば、より精度の高い比較が可能になるだろう。

4. むすび

本稿では、中世ユダヤ教聖書解釈の諸相の例として、イブン・エズラ、ヨセフ・キムヒ、『セフェル・ニツアホン・ヤシャン』、アザリヤ・デイ・ロッシによるラテン語聖書およびヒエロニウムスへの言及を見てきた。彼らの議論から明らかのように、宗教論争においてキリスト教徒が議論の土台として用いるラテン語訳聖書の本文は、ユダヤ教徒にとって論争の勝敗を左右する重要な情報源だった。同時に、ヘブライ語テキストに対するキリスト教徒の知識も、ほとんどがヒエロニウムスの聖書注解に基づくものであったので、これを参照することでユダヤ教徒は相手の手の内を知ることができた。中世のユダヤ教聖書釈義家にとってのヒエロニウムスは、一方ではキリスト教徒の代表として批判の対称でもあり（イブン・エズラやヨセフ・キムヒの場合）、他方ではキリスト教徒でありながらユダヤ教を正当化してくれる存在でもあったのである（『セフェル・ニツアホン・ヤシャン』やアザリヤ・デイ・ロッシの場合）。

⁵³ アザリヤ・デイ・ロッシ『メオール・エナイム』9 (Cassel, ed., ספר מאור עינים, 148; Weinberg, *The Light of the Eyes*, 191) : ועם כל זה כי תבקש את הפסוקים הנמצאים להם משונים מכתבי הקדש אשר על הנקלה תמצאם בלוח הנדפס אחרי הביב"ליאה רומיית ... תראה כי השתנותם בעצמו הנו כמו כן בפתרון היוני ...

19世紀になると、ユダヤ教を科学的に研究しようとする「ユダヤ教科学」の運動が盛んになったが、そこでもヒエロニウムスは特別な存在だった⁵⁴。ユダヤ教科学の学者たちは、現存するラビ文学中の伝承を、教父たちが保存するユダヤ伝承と比較することによって、個々の伝承の起源を特定したり、分かりにくい解釈を解明したり、ラビ文学中では失われた解釈を復元したりした。その際に参照された教父たちのうち、ユダヤ教徒との直接の交流を持っていたヒエロニウムスは、信頼できる情報の持ち主として特に重視された。しかしそれ以上に、本稿で見てきたような中世のユダヤ教聖書釈義家たちのヒエロニウムスへの拘りがあったからこそ、19世紀の学者たちもまた彼に注目できたのではないだろうか。

⁵⁴ ユダヤ教科学におけるヒエロニウムスについては、加藤『ヒエロニウムスの聖書翻訳』71-108頁; G.K.Hasselhoff, "Sapientes docent traditiones: Der Rabbiner Moritz Rahmer und der Kirchenvater Hieronymus," in *Die Entdeckung des Christentums in der Wissenschaft des Judentums*, ed. G.K. Hasselhoff (Berlin: De Gruyter, 2010), 147-63.